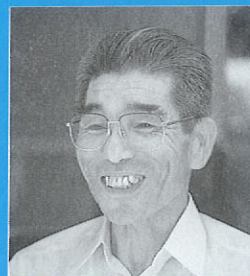


高齢者にとって



社会に必要とされている
自分を実感する。

まだまだ現役。
この年だから仕事が楽しめる。

田中隆さん(六二)は、元JR職員。現在は、八代シルバー人材センターの会員として、ひと月のうち約一週間で有料駐車場の整理員として働いています。「シルバー人材センター」とは、臨時、短期的な仕事を組織で請け負い、会員を派遣する自主団体です。会員は



「事故のないよう、車に傷をつけないように。気は抜けません」

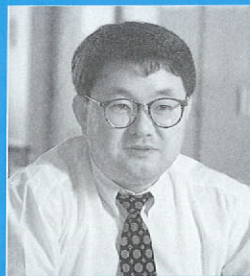
六十才以上の健康な者に限るといいう制約があります。

田中さんは、定年後しばらくは、仕事から開放された喜びで、実家の農作業などを気ままに手伝っていました。そのうち、時間をもてあまし始め、「仕事をしたい」と思うようになりました。そんな時、シルバー人材センターのことを知り会員になりました。

田中さんは、朝三十分以上も早く出勤し、伝票一つにしても「こんな風にしたらもつと効率が良いのでは？」と経営者に提案するなど、とても仕事熱心です。「田中さんの働きぶりは、他の若い人たちのお手本です」と経営者の久野杏子さん。そして、「張り切つて仕事しているお父さんがいい」と妻のマツヨさん。

「お金じゃない。まだ社会の役に立てるという実感がいいんです。健康である限りは仕事を続けたい」。田中さんは、第一線で働いていた頃にも増して、仕事のやりがいや楽しさを味わっているように見えます。

働く人々にとって



豊かに、そして
いきいきと
暮らしたい。

「心が満足する生活をしたい」。
熊本を永住の地と決めた浪花の男子

「仕事より生活を大事にしたい」。現在、熊本市内に本社を置く流通業の情報システム部に勤務している喜多信弘さん(三三)は、大阪生まれの大阪育ち。今年四月、その住み慣れた土地を離れ、熊本に移住して来ました。

「将来は田舎に住みたいと、ずっと思っていたんです」と喜多さん。田舎暮らしを勧める本で、本県のUターンアドバイザー制度を知り、紹介された数社の中から、コンピュータの専門知識を生かせる今の会社を選びました。「コンピュータの仕事はどこでも出来るけど、精神的なゆとりのある生活は場所を選ぶと思います」。

住まいは宇土郡不知火町。市内ではなく、緑豊かなこの地をあえて選択。車での通勤時間は四十分です。「大阪で満員電車で押し込まれての一時十分分に比べれば、はるかに快適ですよ」。休日には、天草へのドライブや阿蘇の山歩



休日は、阿蘇や天草など熊本の自然を楽しんでいる。

きを楽しんだり…。「こちらに移住することを反対した両親も、熊本に來たら、僕の気持ちが分かると思います」。喜多さんは満足げに話してくれました。
*Uターンアドバイザー制度
東京都事務所 大阪事務所 熊本公共職業安定所にUターンアドバイザーを置き、高度の専門技術を有する人の本県での就職を援助しようというもの。

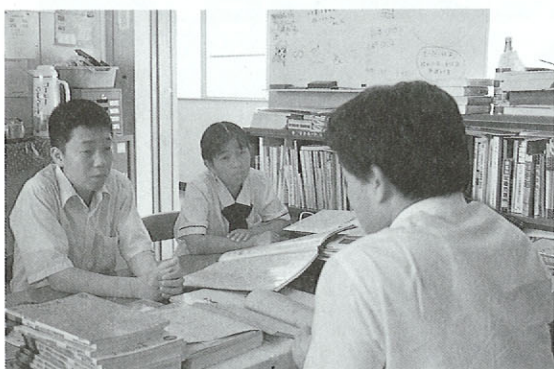
若者にとって



働くところを
“ふるさと”に
こだわりたい。

「本当は生まれ育ったところで働きたい」。県外へ出ていく若者の本音

七月一日から、いわゆる就職解禁。夏から秋にかけてのこの時期は、就職希望の生徒たちが、会社や職種をだんだんと絞り込んでいく頃でもあります。この春、県下の高校を卒業し、県内に就職した若者は五、二三四人。しかし、実際に県内就職を希望していたのは、



夢と不安がいっぱい。一生の仕事を決めるのだから…。

六、二四五人でした。その差、一、〇一人の生徒たちは、県内就職を希望しながら県外へ出ています。

「ぼくらの時代は何が何でも東京という風潮だったけど、最近は、県内に残りたいと言う生徒が多いですね」と証言するのは、進路指導歴十年のキャリアを持つ県立河浦高校の鎌田良一先生。「しかし、実際には、地元には希望する職種が少なく、やむを得ず県外へというケースが少なくありません」。

また、都市部に集中する県内の企業も自宅通勤者を採用したがるようです。売り手市場と言われ、生徒数の十倍以上の求人があっても、希望通りの就職が難しい郡部高校の生徒たち。「生まれ育った場所は好きだし、いつかはここで暮らしたいけど・・・」。と半導体メーカーへの就職を希望している原田紀一君(河浦高校三年)。「本当は、地元に残ってほしいけれど、大きい企業の方がより安心だから。息子を送り出す親の方にも、いくばくかのジレンマがあるようです」。

子供たちにとって



“汗を流すことは
楽しい”ってことを
学ぶ。

「自分でやってみて、苦労も楽しさも分かった」。勤務生産学習

十一月、ミカン収穫の最盛期を迎えた宇土半島の山では、中学生たちが、籠を担いばさみを片手にミカンの収穫を手伝います。宇土郡三角町立青海中学校の「勤務生産学習」の一コマです。この生徒たちのほとんどはミカン農家の子どもたち。とは言っても、「日頃は部活動で忙しく、家の手伝いをする生徒は二割もいません」と佐田祐一校長。農繁期ぐらい、家の手伝いをしようということから、この奉仕作業は始まりました。

作業は一年に一回、約四時間。学校単位で自由に使える「創意の時間」が当てられます。自分の家の畑に行くとは限らず、友達の家や地域の人の畑に行くこともあります。指導は地域の人たちです。「大人のように早くちぎれなかつた」、「お父さんの苦労が分かった」など、作業後の感想文には、自分で汗を流して初めて知る気持ちが綴ら



農家の人から、ミカン収穫の仕方を習う子どもたち。

れています。「三年生になって作業も早くなると、期待されているという充実感があるようです」と佐田校長。「台風で傷ついたミカンが多くて残念だった」。台風の実害を目の当たりにして、家族や地域が抱えている問題を知るきっかけにもなりました。勤労体験から得られる辛さや喜びはまた、子どもたちが地域に生きていることを実感する学習でもあります。